幸福について

ショーペンハウアー 著　鈴木芳子 訳

谷本愼介（評）

本書はショーペンハウアーの „Aphorismen zur Lebensweisheit“ の全訳である。ショーペンハウアーの文体は本書のようなエッセーであれ、主著『意志と表象としての世界』であれ、この上なく簡潔、明快である。哲学者の文体としてはヘーゲルやフィヒテなどの晦渋、難解な文体の対極にあって、彼を「教育者」つまり師と仰いだニーチェの文体にも少なからず影響を与えた。ただ、原文のドイツ語が簡潔、明快だからといって、それを日本語に翻訳した時は、訳語や翻訳文の文体の選択などで、異同が生ずるのは当然の事である。

「本邦初訳」の場合は、誤訳の心配がつきまとうが、未踏峰の頂上を極める時のような勇気や使命感が訳者を後押しするだろう。本書の場合は既訳がいくつかある。読者がショーペンハウアーの『幸福について』を本訳書によって初めて知ったなら、現代日本人向けの読みやすい文章、原文にはない改行を適宜加えて、理解を容易にする配慮が行き届いた翻訳書として、推奨に価するだろう。Sich zu mühen und mit dem Widerstande zu kämpfen ist dem Menschen Bedürfnis, wie dem Maulwurf das Graben.(S.479) という原文が「モグラが土を掘らずにはいられないように、人間はあれこれ骨を折り、抵抗し闘わずにはいられないものなのだ」(263 頁)と平易かつ的確に訳されているのは好例といえる。

ただ、すでに他の訳書を読んだことのある者が本書を読んだ時は、既視感、今の場合は既読感に襲われる。具体的には橋本文夫訳の新潮文庫版と本書を読み比べると、橋本訳が辿った道程と別の新しいルートを開拓するのではなく、この「新訳」は終始一貫、橋本訳とまったく同じルートを辿りながら、たまにちょっとだけ道草を食うように独自性を主張する。例えば、Daß oft die allerbesten Gaben die wenigsten Bewunderer haben, (S.431)は橋本訳では「世にも優れた才能を讃える人の少なさよ」(161 頁)であり、鈴木訳では「世にも優れた才能を讃える人の少なさよ」(168 頁)、つまり一字一句違わない。白水社版全集の金森誠也訳では「最もすばらしい才能も、ときにはきわめて少数の讃美者しかいない」(237 頁)となっていて、橋本訳とは根本的に文体が異なる。紙幅の制約のために断念せざるをえないが、同様の例は無数に挙げられる。

今は亡き橋本文夫氏はこの「新訳」を一読したら、瞋恚の炎を燃やすだろうか、いや、たぶんショーペンハウアーの戒めに従うだろう。真の賢者はじっと辛抱して、むやみやたらに怒らないのである。

『幸福について』(2018 年)
ショーペンハウアー著　鈴木芳子訳
光文社古典新訳文庫　本体価格 1000 円（税別）
Arthur Schopenhauer: Aphorismen zur Lebensweisheit (1851)

ワイマールのジビュレ妃 －クラーナハ父子の描く肖像－

佐藤洋子 著

高坂純子（評）

肖像画とはこんなにも雄弁だったのか、と本書を読んで思った。表紙カバーを飾る《花嫁ジビュレ・フォン・クレーフェ》は、ドイツが宗教改革に揺れた 16 世紀はじめ、ライン河畔の領地からザクセン公国へと嫁いできた王妃を、宮廷画家ルカス・クラーナハ（父）が描いたものである。張り詰めた表情でじっと前を見つめる「ワイマールのジビュレ妃」、著者はその眼差しのその先に、彼女が生きていた 500 年前の「人間の営みと価値観」を追う。

本書の大きな魅力は、この宗教改革という「地殻変動」の時代が、同時代の画家たちの手になる肖像画を通して浮き彫りにされている点にあるだろう。ルターがヴィッテンベルク城付属教会の扉に「95 か条の提題」を貼り出したのは 1517 年 10 月 31 日、その 3 年後、初めてルターの肖像画がクラーナハ（父）によって銅版画に刻まれた。クラーナハ（父）が残したルターの肖像画は、博士帽をかぶったルター、郷士イェルクに変装したルター、妻カタリーナ・フォン・ボーラと並ぶルターなど 1000 点に及ぶと言う。ルターのドイツ語聖書は活版印刷術の発明によって広く普及するが、まだ識字率の低かった当時、肖像画は一種の「イメージ戦略」の役目を担い、新しい思想の「顔」となって宗教改革に大きく貢献した、と著者は指摘する。また為政者たちの肖像画も、激しい時代のうねりを伝えている。カトリックかプロテスタントか、宗教改革が領邦間の権力闘争へと移行していくプロセスを、著者の案内で《神聖ローマ皇帝カール 5 世》や《ザクセンの三選帝侯》などの肖像画を手がかりに辿ってみる。そうすると、騎士戦争から農民戦争、そしてかの「ジビュレ妃」の夫ヨハン・フリードリヒを巻き込んだシュマルカルデン戦争までの変遷が、立体的に立ち現れてくる。肖像画には不思議な力があるようだ。

本書には、デューラーなど他の画家たちによる作品も数多く添えられている。カラー版口絵は 33 点、本文口絵は 53 点に上る。本の副題は「クラーナハ父子の描く肖像」だが、ドイツルネサンス全体を俯瞰した研究書である。ゆかりの地を記した巻末の地図がありがたい。そして各地の教会や美術館にそれぞれの絵を訪ね歩いた著者の詳しい作品解説が、何よりも貴重な一冊である。

『ワイマールのジビュレ妃 －クラーナハ父子の描く肖像－』（2018 年）
佐藤洋子著
中央公論事業出版
本体価格 3000 円（税別）

朝の祈り

ゲルトルート・ロイテンエッガー 著　五十嵐蕗子 訳

若林恵（評）

この小説の主な舞台となっているのは、イタリア語圏スイスの湖の湾に浮かぶ質素な塔であり、それは鳥捕獲のための設備であった塔のレプリカであるという。鳥捕獲について調べてみると、ヨーロッパでは食糧としての野鳥の捕獲は石器時代から行われていたようである。歌声を楽しむための鳥飼育の習慣は中世以来とのこと、そういえばモーツァルトの『魔笛』(1791)のパパゲーノも鳥を捕まえて女王に献上することを生業とする Vogelfänger である。鳥捕獲は太古の昔より人々が慣れ親しんだ習慣の一部だったのだろう。もちろん 21 世紀現在では環境問題や野鳥保護の観点から、EU 全域で、残虐な罠を用いての鳥捕獲は禁止されているのだが、一部とくに南欧各地で今でも捕鳥が続けられ、動物保護や野鳥保護団体に批判されているようである。

本書の語り手の仕事は、市に雇われた学芸員として塔に住みながら、かつて行なわれていた捕鳥と塔の生活について訪問者に説明することであり、彼女がこの塔で過ごす 30 日間が物語の枠組みである。しかし全体を通して出来事の内容把握は難しい。過去と現在が複雑に交錯するうえに、断片的に描かれる出来事や人物が現実なのか夢なのか、実在なのか幻影なのかも判然としないからである。たとえば塔の唯一の訪問者ヴィクトリアは（彼女だけ名前が与えられているのはなぜだろうか）どうやら南米からの不法移民らしいが、彼女は現実の人間かどうかも怪しいうえに（捕獲されて傷を負った鳥かもしれない）、語り手は彼女の苦境を自身の境遇とも重ね合わせているようでもある。その他にも、モチーフのように繰り返し現れる人物や情景も夢のごとく断片的であり、語り手の人生とどのように関連しているのか不明なまま放置される。この小説は説明可能なストーリーを拒んでいるのであり、あちこち暗示的に散りばめられた多様なエピソードの断片が交錯して複層的に重なり合うことで構成されている。しかしそのような個々の断片が、「理解」の外側で読み手に深い印象を与える。

タイトルの Matutin は、訳者解説にもあるとおり、夜中から早朝にかけてのカトリックの祈り「朝課」であるが、捕鳥塔は一見したところ祈祷とは無縁に見える。しかしながら極限まで簡素な塔は僧房にも比せられ、語り手が鳥や自分たちの苦しみを想う祈りの場ともなっており、やはり塔は追憶と祈念の空間なのだろう。多様なイメージの複合体であるこの小説の翻訳は難しさと楽しさとを味わわせてくれるに違いないが、いずれにしても数少ないスイス女性作家の優れた作品に取り組んだ訳者に敬意を表したい。

『朝の祈り』(2017 年)
ゲルトルート・ロイテンエッガー著　五十嵐蕗子訳
書肆半日閑　本体価格 2700 円（税別）
Gertrud Leutenegger: Matutin (2015)

はじまりが見える世界の神話

植朗子 編著　阿部海太 絵

馬場綾香（評）

人間は生きていく上で、簡単には説明のつかない疑問にぶつかることがある。

「とりわけ不思議に思ったのは、『魂はどこからやってきて、どこへ帰っていくのか』ということでした。そして、自分たちの努力ではどうにもならない『運命』についてでした。」「まえがき」の中で編著者の植はこのように述べる。

本書はこうした「不思議」に神話という形でひとつの解答を示そうとするものである。と言っても明確に答えが与えられるわけではない。あくまでも何らかの答えとなりうる物語が、それも複数提示されるのみである。

本書には様々な「世界のはじまり」が語られている。植自身が専門とするドイツ語圏の「森」にまつわる起源説話に始まり、中米、北欧、イスラエル、シベリア、琉球、ケルト、パプアニューギニア、ギリシア・ローマ、アルメニア、スラヴ、ニュージーランド、中国、エジプト、北米、インド、イスラーム、アイヌ、と多彩な地域・文化圏に伝わる「はじまりの物語」をそれぞれの専門家による丁寧な文章で読むことができる。殊に日本の記紀神話については古代と中世というふたつの視点からのテクストが並べられている。同じ地域の神話であっても時代によって異なる意味づけが生じるということであり、その読み比べは神話が単なる化石ではなく生物なのだという点からも興味深い。

今この世界に生きている我々がこの世界の「はじまり」を見ることは叶わない。見ることができないはずの場面を「見せて」くれる物語、それが神話である。

本書に紹介された神話の中ではしばしば人知を越えたところで起きる「はじまり」が語られる。地域によって、時代によって、語られる神話は様々である。しかしまえがきで述べられたような「魂」や「運命」といった人の力ではままならぬものへの問いかけは共通しているように思う。そうした問いを人間は昔から抱き続け、その問いに答えうるものとしての可能性が「世界のはじまり」に関する物語なのである。

多彩な神話の世界から見えてくるものとは、「答え」はひとつではないということではないだろうか。本書では神話のテクストそのものは平易な文体で語られており、阿部海太氏による魅力的な絵と共に一般書として楽しむことができる。一方で各章に専門的観点から解説が付されており、関心を掘り下げることも可能である。その中から読者自身が納得のいく答えを探してみるというのも本書の味わい方ではないだろうか。

『はじまりが見える世界の神話』（2018）
植朗子編著　阿部海太絵
創元社　本体価格 1700 円（税別）

「愛の時代」のドイツ文学－レンツとシラー－

菅利恵 著

久山雄甫（評）

著者の前作『ドイツ市民悲劇とジェンダー』（2009年）からの、堅実かつ鮮やかな展開である。本書の第１章末尾には、レッシングの『エミーリア・ガロッティ』をめぐる問題が手際よくまとめられていて、文学作品を題材にドイツ語圏の啓蒙時代を「愛の時代」として読み解いていくための格好の出発点（かつ前著からの親切な橋渡し）になっている。

本書の中心テーマである「愛の時代」、つまり近代人が自らの存在の拠り所を親密な「愛」に見出そうとした時代は、世界観や価値観の絶対性を多かれ少なかれ前提にできた「宗教の時代」と 19 世紀的な「ナショナリズムの時代」の狭間に位置づけられる。ルーマンやハーバマスによる社会学的な議論を下敷きにして激動の時代を紐解いていく著者の筆遣いは、大胆にして細やかだ。日本語副題をなしている２名は上記の前著でも扱われていたが、本書ではレンツの『哲学者は友達によって作られる』と『森の隠者』、シラーの『ドン・カルロス』、『マルタ騎士団』、『オルレアンの処女』、そして『ヴィルヘルム・テル』が特に詳しく取り上げられている（表紙には他にドイツ語でのみヴィーラント、ゲーテ、レッシング、イフラントの名前が挙がっていて、彼らはいわば名脇役といったところだろう）。特に『哲学者は友達によって作られる』や『マルタ騎士団』のような、無名とは言わないまでも従来あまり注目されてこなかった作品を丁寧に分析し、そこから見事に自説を裏付けていく手さばきに、読者は思わず引き込まれてしまうのではなかろうか。

「愛」に基づいた市民的な道徳や親密圏のあり方は、それ自体が矛盾や暴力を内包していたり、あるいは現実離れした理想空間にとどまったりして、新しいアイデンティティの基盤となりきれないまま様々な経路でナショナリズムへと流れ込んでいく。こうした歴史の流れを批判的に吟味するなかで著者が注目するのは、ヴィーラントに代表されるコスモポリタニズムの可能性である。ただし、本書も詳しく検討しているように、当時これは必ずしもパトリオティズムの反対語ではなかった。むしろアプトにせよシューバルトにせよシラーにせよルソー（！）にせよ、このころ有力な文章家たちが流布させていた言説においては両者がしばしば「同居」している。世界市民性と愛国の問題を論じる著者の語り口は、必ずしもスムーズではない。安易な一般化や図式化を避ける知的誠実さ、それゆえの歯切れの悪さ、そして、それにもかかわらず果敢に論を進めようとする姿勢は、「愛」と「共同体」の思想史を問題化し続けることの重要性を訴えかけてくる。

『「愛の時代」のドイツ文学―レンツとシラー―』
（2018 年）
菅利恵著
彩流社　本体価格 3000 円（税別）

奇跡にそっと手を伸ばす

ドーリス・デリエ 著　小川さくえ 訳

片岡律子（評）

10篇からなる物語の主な登場人物は4人と犬1匹である。スペインのリゾート地に、幸福な生活を「すべて込み（alles inklusive）」で手に入れようとドイツ人が大勢やって来る。ここで主人公達の過去と現在が異なるパースペクティヴの下で表出される。

アップルは子供の時、母イングリトとカールの情事を目撃する。夫に裏切られたハイケは別荘のプールで自殺してしまう。それ以来、息子のティムは、母のドレスを身に着ける女装者ティーナとして生きている(「ようこそいらっしゃいませ」「ウサギさん」)。神経性皮膚炎を発症したアップルは、美しい手をした男と出会い皮膚炎が治り、その男と同棲する（「美しい手」)。腎臓病の夫ラルフのため住む家を探しにスペインへ行ったズージィは、案内された家に突風のせいで閉じ込められてしまう。夜、藪の中で売春をして生きるアフリカ難民の黒人女性が助けにくる（「オレンジの月」)。カールと再会したイングリトは、妻ハイケを救えなかったことを悔いているカールに、奇跡のビー玉を握らせる（「約束の地」)。同棲相手に裏切られたアップルは、ズージィの住むイビサ島に来る。市場で、同性カップルの男達の中に、腎臓移植後、同性愛者になったラルフを見かける（「メドゥーサ」)。難民ボートで逃げてきた黒人を助け、ハイケの墓に詣でたイングリトは、遠くで光る海はドイツ人にとっては憧れ、アフリカ人にとっては多くの難民が眠る死の海なのだと思う（「奇跡」)。ティーナは男装の女ディエゴと組み、ガスの修理代をだまし取っていた。ある家で、無料点検だと言ってしまい、怒ったディエゴは羊毛（カネ）とともに姿を消す（「羊毛」)。アップルは、要介護犬のフロイトを職場に連れて行き解雇されるが、生の不安を取り除いてくれるフロイトがいれば、最上の結果だけを予想出来るのだった（「喜びと悲しみ」)。カールのかつての別荘で休暇を過ごしていたズージィがティーナと一緒に聖ヨハネの前夜祭に使う薬草を集めて戻ると、フロイトがプールで溺れ死んでいた。ティーナが懸命に人工呼吸を施し、フロイトは息を吹き返す。夜、火祭りの中でズージィにラルフが携帯電話で、枕の下の薬草のせいでズージィだけの夢を見たと言う(「聖ヨハネの前夜祭」)。

この物語は、ごくありふれた者たちの喜び、悲しみ、苦しみを生き生きと描出し、真のリアリティを獲得している。特に、悲しみ苦しみを超え、喜びと幸福感に包まれる最終話は圧巻である。自殺したカールの妻ハイケを含め、主人公全員が、大きな苦難を経て天国の門にたどり着く白い衣を着た群衆（『新約聖書』ヨハネの黙示録　第 7 章 9 節−17 節）の一員にやがて加えられることを想起させ、読む者を魅了する。これは、原作が持つ深く密度の高い内容もさることながら、この作品が翻訳であることを忘れさせる読み易く的確な文体に負うものであろう。翻訳者の力量と磨き上げた工夫をたたえたい。

『奇跡にそっと手を伸ばす』（2018 年）
ドーリス・デリエ著　小川さくえ訳
鳥影社　本体価格 2250 円（税別）
Doris Dörrie: Alles inklusive (2011)